

1. 主はモーセを呼び寄せ、会見の天幕から彼に告げて仰せられた。
2. 「イスラエル人に告げて言え。  
もし、あなたがたが主にささげ物をささげるときは、  
だれでも、家畜の中から牛か羊をそのささげ物としてささげなければならない。
3. もしそのささげ物が、牛の全焼のいけにえであれば、傷のない雄牛をささげなければならない。  
それを、主に受け入れられるために会見の天幕の入口の所に連れて来なければならない。
4. その人は、全焼のいけにえの頭の上に手を置く。  
それが彼を贖うため、彼の代わりに受け入れられるためである。
5. その人は主の前で、その若い牛をほふり、  
祭司であるアロンの子らは、その血を持って行って、  
会見の天幕の入口にある祭壇の回りに、その血を注ぎかけなさい。
6. また、その全焼のいけにえの皮をはぎ、いけにえを部分に切り分けなさい。
7. 祭司であるアロンの子らは祭壇の上に火を置き、その火の上にたきぎを整えなさい。
8. 祭司であるアロンの子らは、  
その切り分けた部分と、頭と、脂肪とを祭壇の上にある火の上のたきぎの上に整えなさい。
9. 内臓と足は、その人が水で洗わなければならない。  
祭司はこれら全部を祭壇の上で全焼のいけにえとして焼いて煙にする。  
これは、主へのなだめのかおりの火によるささげ物である。
10. しかし、もし全焼のいけにえのためのささげ物が、  
羊の群れ、すなわち子羊またはやぎの中からなら、傷のない雄でなければならない。
11. その人は祭壇の北側で、主の前にこれをほふりなさい。  
そして祭司であるアロンの子らは、その血を祭壇の回りに注ぎかけなさい。
12. また、その人はそれを部分に切り分け、  
祭司はこれを頭と脂肪に添えて祭壇の上にある火の上のたきぎの上に整えなさい。
13. 内臓と足は、その人が水で洗わなければならない。  
こうして祭司はそれら全部をささげ、祭壇の上で焼いて煙にしなさい。  
これは全焼のいけにえであり、主へのなだめのかおりの火によるささげ物である。
14. もしその人の主へのささげ物が、鳥の全焼のいけにえであるなら、  
山鳩または家鳩のひなの中から、そのささげ物をささげなければならない。
15. 祭司は、それを祭壇のところに持って来て、その頭をひねり裂き、祭壇の上でそれを焼いて煙にしなさい。  
ただし、その血は祭壇の側面に絞り出す。
16. またその汚物のはいった餌袋を取り除き、祭壇の東側の灰捨て場に投げ捨てなさい。
17. さらに、その翼を引き裂きなさい。  
それを切り離してはならない。  
そして、祭司はそれを祭壇の上、火の上にあるたきぎの上で焼いて煙にしなさい。  
これは全焼のいけにえであり、主へのなだめのかおりの火によるささげ物である。
4. その人は、全焼のいけにえの頭の上に手を置く。

それが彼を贖うため、彼の代わりに受け入れられるためである。

ׁwyl 'l' rPk:l. Al hcr'ni hl '[b' varol [; Ady' %answ

Piel. hcr'Ni. *be accepted* whole burnt-offering Qal. *lay hand upon, rested his weight*

*be pleased with, favourable to* hl 'l' *go up, ascend, climb*

## 説教

レビ記は、神さまを礼拝する具体的なあり方について詳細に規定しています。

現代に生きる私たちにとっては、

なかなか読みにくく、理解しがたい内容ですが、実はとても大切なことを私たちに教えてくれています。

ユダヤ人が伝承してきた 613 のミツポート（「規定」）という掟の半数以上がこのレビ記の教えに基づいています。

そして、子どもたちはこのレビ記から聖書を学び始めます。それほど大切な内容を持つのです。

レビ記には礼拝儀式的あり方、特にいけにえを捧げる儀式的のことが実に細かく記されています。

すでに二年前に講解した出エジプト記で学んだことですが、

いけにえを屠る幕屋とは、

かつてモーセ率いるイスラエルが神と出会い、神の栄光を見て、神のみことばを聞いた、あのシナイ山の携帯版です。

イスラエルはシナイ山で神と出会い、神と交わりをしましたが、

しかし、だからといってそのシナイ山にいつまでもとどまっているわけにはいきません。

荒野を旅し、荒野を越えて、約束の地カナンを目指さねばなりません。

それで、神さまは、

イスラエルがどこに行っても

神さまも彼らと共におられることを示すために、

言わば携帯用のシナイ山として、幕屋を造ることを指示なさいます。

そして、イスラエルが荒野にいる間中、その幕屋を通してご自身の臨在を現されたのです。

それでは、具体的にはどのように神さまはイスラエルと共におられたのでしょうか。

人はどのように神さまと交わりをすることができたのでしょうか。

どのようにして神さまに受けいられたのでしょうか。

神さまはどのようにして人にご自身を現されたのでしょうか。

どのように人を赦し、受け入れ、聖め、彼らにみことばを与えて、ご自身の栄光をあらわされたのでしょうか。

その具体的な内容がこのレビ記に記されているのです。

私たちは、

神さまが私たちを愛しているとか、

罪を赦してくれた、

祈りを聞いてくださる、祝福してくださる、と極めて単純に信じております。

でも、それは一体どういう意味なのでしょうか。

神さまが愛してくださるとはどういうことなのでしょう。

神さまが罪を贖ってくださるとか、赦してくださるとか簡単に考えますが、それは一体どのようにしてなのでしょう。

どのような形で、

どのようなメカニズムで、

あるいはどのような思いで、

私たちが愛し、赦し、祝福して、共にいて、導いてくださるのでしょうか。

それがレビ記の内容そのものなのです。

レビ記一章には

いけにえの血を流し、それを切り裂いて、全部焼き尽くすという全焼のいけにえの儀式のことが記録されます。

そうしてこそ初めてその人の罪が贖われ、神に受け入れられることが記されます。

最近では被害者の立場に立って裁判をしるとよく言われます。

自分の身内を殺された人の話は、殺した相手に一体どこまでの報復を求めることでしょうか。

それは身内が殺されたように、殺すということです。

そうしなければ殺された側は気が収まりません。

実際にはそれだけでも気が収まらないと思いますが、

それでも死刑が極刑でそれ以上の罰はあり得ないので、せめて殺してやらないと気が収まらないということでしょう。

これが罪の赦しということです。

罪を赦すと言っても、ただ漫然と赦せるものではありません。

また、そんなことをできる人もいません。

たとえ表面上、あるいは言葉の上で赦したとしても、心の中ではそう簡単にはいきません。

本当に相手をぶっ殺してやりたい、という思いと格闘せずにはいられません。

自分の身内がやられた、

それと同じように、自分も相手の血を流し、

息の根を止めて、その上八つ裂きにして、

八つ裂きにした肉片をすべて残らず火で焼き付くしてやらなければ、気が収まらないことでしょう。

勿論、そんなことをすれば、相手は当然生きていることはできません。

そこで、「身代わりのいけにえ」というものが必要となってくるのです。

この感情は、神さまも同じです。

人間がその形に造られた神さまも同じです。

神さまが私たちの罪を赦してくださると言う時、それはただ漫然と赦してくださるわけではありません。

神さまは、私たち罪人の罪に対して猛然と聖なる怒りを発せられるのです。

そして、罪人の血を流し、息の根を止めて、八つ裂きにし、

その八つ裂きにした肉片をすべて残らず火で焼き付くさねば、気が収まらないことでしょう。

でも、そうなったら、神さまがそんなことをなさったら、私たちはひとたまりもありません。

生きていることができません。

そこで、私たちの身代わりとなるいけにえが必要となってきます。

それが全焼のいけにえです。

レビ記一章は、

神の民イスラエルが、

自分たちの手によっていけにえを殺し、

血を流し、切り刻んで、それらすべてを火で焼き尽くす、その一つ一つの過程を通して、

本来は自分自身が神の怒りを身に受けて、このように殺され、血を流し、切り刻まれて、

地獄の火で焼き尽くされて然るべきところを、この身代わりのいけにえによって助かった、

救われた、ということ、生々しくこの目で見て、手で触れ、耳で聞き、体験するようにと定められています。

イスラエルの民は、自分がいけにえを殺したその返り血を浴びながら、血生臭く、嫌と言うほど生々しく体験したのです。

そして、その身代わりのいけにえの死を目の当たりにすることで

束の間の死を味わい、その死によって生かされている喜びを実感しました。

自分がこうして生きているのはただいけにえの死によることであり、

いけにえの死が自分を生かしているくれていると血生臭く実感しつつ生きました。

「全焼のいけにえ hl' [0オーラー] (4) とは

「立ち上る」の意味で、すべて焼かれて煙になって神のもとに「立ち上る」ことを意味します。

捧げたら最後何も残らず、全て煙となってしまうのです。

これは捧げ物中の捧げ物と言えます。

「捧げる」というのは、何も無くなっちゃうんですよ。

自分のものを一つも残さず、全部無くなっちゃうんですよ。

「半分」残すとか、収益金の「一部」をチャリティーに寄付します、

というような、中途半端な、往生際の悪い言い分は決して許されないのです。

頭のとっぺんから足のつま先まで、何一つ残さずみんな焼いて煙にしてしまう、

そうやって、天におられる神さまのもとに「立ち上らせる」、それが全焼のいけにえです。

まず、「家畜の中から...ささげなければならない」と言います(2)。

## 2. 「イスラエル人に告げて言え。

**もし、あなたがたが主にささげ物をささげるときは、**

**だれでも、家畜の中から牛か羊をそのささげ物としてささげなければならない。**

全焼のいけにえは、自分の所有する家畜の中から捧げよと言います。

捧げるいけにえは「自分の身代わり」です。

言うなれば、「自分自身」であります。

ですから、自分の所有する貴重な財産である「家畜」を捧げなければなりません。

適当に野生の動物を捕まえて捧げるのではダメなのです。

自分のものを捧げなければなりません。

自分の財産を捧げなければなりません。

自分が養い、世話し、育てた、自分の貴重な財産である「家畜」を捧げねばならないのです。

そして、ささげ物はその人自身の手で殺して切り裂きます(5,6,11,12)。

- 5 . その人は主の前で、その若い牛をほふり、  
 6 . また、その全焼のいけにえの皮をはぎ、いけにえを部分に切り分けなさい。  
 11 . その人は祭壇の北側で、主の前にこれをほふりなさい。  
 そして祭司であるアロンの子らは、その血を祭壇の回りに注ぎかけなさい。  
 12 . また、  
その人はそれを部分に切り分け、

4節を見ると、

屠る前に、捧げる人は「頭の上に手を置き」ます。

- 4 . その人は、全焼のいけにえの頭の上に手を置く。  
それが彼を贖うため、彼の代わりに受け入れられるためである。

この「手を置く」という行為は、要するに「これは私です」という行為です。

その家畜は、その人の「身代わり」なのです。

4節後半で言われるように、「彼の代わり」です。

その家畜はその人の「代償」です。

「その人自身」なのです。

ですから、その「いけにえを差し出す」ということは、「その人自身を差し出す」に等しいことです。

それで、「彼の代わりに、受け入れられる」のです。

その人の罪がそのいけにえに伝達されるのみならず、

その人自身の実存、全人格、全存在が、いけにえに、そっくりそのまま「代償」されるのです。

そうして、その代償の「いけにえ」が彼に「神に受けいられる」こと、「贖い」をもたらすのです。

それで、「手を置く  $\%ms'$ 」という言葉は、単に「置く」のみならず、「重々しく寄りかかる」ことも意味します。  
 奉献者は、

自分の捧げるいけにえに自分の全存在を「代償」し、全面的に依存し、

生きるか死ぬかの彼の命運はその「代償」のいけにえに全面的に依りかかっているのですが、

しかし、その彼が全面的に頼っているところのそのいけにえが「彼を贖う」とレビ記は約束します。

- 4 . その人は、全焼のいけにえの頭の上に手を置く、それが彼を贖う」と言うのです。

この「贖う  $rpk'$ 」という言葉は「覆う」という意味で、自分の視界から見えなくすることを意味します。

すなわち、罪人が全焼のいけにえを捧げる時、神さまはその罪人を見ないようにしてくださるのです。

視野から覆い隠します。

そして、いけにえだけをご覧になります。

罪人が神さまに捧げたいけにえだけをご覧になるのです。

そうやって、罪人を見ない、

罪人の身代わりになって殺された全焼のいけにえだけを見て、罪人を見ない、

そうして、罪人へ下すさばきを思いとどまってくださる、と言うのでした。

奉献者は、自分の手で、いけにえを「主の前に(5、11)」、殺します。

- 5 . その人は主の前で、その若い牛をほふり、

11. その人は祭壇の北側で、主の前に、これをほふりなさい。

こうして、

礼拝者は、本来自分が神の前にさばきを受けて殺されるはずのところを

身代わりのいけにえの死によって助けられたことをリアルに実感して、神さまに感謝し、神さまを礼拝するのです。

しかも、これらの恵みは、金持ちから貧乏人に至るまで、すべての階層に及びます。

金のある人は「牛」を、

そうでもない人は「羊」を、

そして、貧乏な人は、その辺から捕まえてきた鳩などの「鳥」でも構わないと言うのです。

金額ではありません。

自分が神さまに捧げることのできる精一杯の捧げ物で良いのです。

そうして、イスラエルのすべての民が、

自分の捧げる精一杯の捧げ物で神さまの贖いの恵みをリアルに体験できるというのがレビ記一章の教えるところですよ。

言うまでもありませんが、

これらの「いけにえ」はすべて生けるまことの神であられるイエスキリストを指し示す影であります。

キリストこそ、「世の罪を取り除くまことの小羊」、我らの生ける「身代わりのいけにえ」です。

このお方は、私たちの「身代わり」になって十字架に架かって死なれ、我らの罪を贖われたのです。

私たちは神さまに対して罪を犯し、本来、神の怒りと呪いを受けて、

死ぬべき、そして永遠の火で焼かれて殺されても仕方のないものでした。

しかし、父なる神さまは、ご自身の御子イエスキリストを十字架につけて殺し、

その御子キリストの身代わりの死をもって、私たちの罪を贖ってくださいました。

神さまは、罪深い私たちを見ることなく、

私たちの身代わりとなって死なれたイエスキリストを見て、私たちを見逃してくださったのです。

旧約の時代は、この贖いの恵みのリアリティーを、人々は幕屋で体験しました。

礼拝のたびごとに神さまの恵みを生々しく体験したのです。

今は、私たちは、もっと恵みを受けています。

モーセの恵みの上に増し加えられた恵み、神の恵みの成就、

それが歴史上ただ一度だけ成し遂げられた、イエスキリストの十字架の贖いです。

この救いの恵みを、

私たちは毎週の主日礼拝の度毎に、

あるいは毎朝の個人的な礼拝、家庭礼拝の度毎に、リアルに思い出し、

心からの感謝と喜びをもって、神と人を愛し、神の栄光を現して生きていくことができるよう主の御名により祈ります。